

教育実習を終えて

日本語日本文学科 4回生

横 川 弥 玲

教育実習生として過ごした3週間は、毎日が学びの連続であり、大学の授業だけでは経験できない新鮮で刺激的な日々だった。

まず、国語の授業をする難しさを痛感した。これまで大学の授業で何度か国語の授業実践に挑んだが、その時の教材研究が甘かったことを思い知った。自分の中で理解できることが、必ずしも生徒も理解できるとは限らない。生徒の目線に立ち、教材を様々な角度から研究する必要があることに気づかされた。板書や発問も、常に生徒の立場を考えながら、見やすさや分かりやすさを考慮して計画していきたいと考える。また、教材研究から得た知識を全て生徒に「教える」のではなく、「気づかせる」生徒主体の授業を展開することの難しさを実感した。私はどうしても一方的に「教える」授業になってしまい、生徒が自主的に考える時間を奪ってしまう授業しかできなかつたと反省している。研究授業で沢山の先生方から頂いた改善策やアドバイスを胸に、4月から教壇に立ちたいと思う。そして、国語の魅力に生徒自身が気づけるような授業を展開していきたい。

次に、生徒と関わることの大切さを学んだ。私が担当した中学3年は、最高学年の威厳を持ち合わせた、純粹で元気な笑顔溢れる温かい学年だった。高校受験に向けて勉強に力を入れながら、最後の中学生生活・学校行事をめいっぱい楽しんでいる生徒の姿を見て、「もっとこの子たちの力になりたい」と心の底から感じた。その気持ちから、やりとり帳（生徒と一言交換日記ができる連絡帳のようなもの）の返事を書くことに力を入れ、休み時間の他愛無い会話を大切にしよう心がけた。すると、表面を見ているだけでは気づかなかった、生徒の抱える進路の悩みや将来の不安を打ち明けてくれることに繋がった。実習最終日に別れを惜しんで涙を流してくれた生徒の姿を思い出すと、今でも心がじんわりと温かくなる。生徒と先生が互いに信頼し合える関係性を築いていくためには、常に生徒と向き合うことが必要不可欠である。日々の些細なやりとりや関わりを大切にすることで、生徒が心を開いてくれるチャンスを掴むことができると確信している。

「先生になりたい」という思いが、教育実習を通してより一層強くなった私に、ある先生のこの言葉が響いた。「先生が落ち込んでいると、生徒もどんよりする。先生が笑顔でいると、生徒も自然と笑顔になる。だから私は常に笑顔を絶やさない先生でありたい」。私の理想の教師像を見つけた瞬間だった。

自分の未熟さや生徒とともに過ごす時間の楽しさ、そして教師という仕事のやりがいを、教育実習で体感し、経験することができた。この初心を忘れることなく、これから続く教師人生を全うしていきたい。

教育実習を終えて

英語英米文学科 4 回生

浅井 ことみ

令和 4 年 5 月 23 日から 6 月 10 日までの 3 週間、母校の中高一貫校で実習を行った。私は、主に中等部で授業を行った。母校であるが、高等部しか卒業していない私にとって、中等部は新鮮であった。私は、中学 1 年生を担当し、少しシャイで元気いっぱいの生徒に出会った。個人的な話になるが実習中に誕生日があり、ハッピーバースディの大合唱をしてくれた事がとても印象的で嬉しかった。ほんの一部だけだが教育現場を知ることが出来た。体育祭や講演会が開催され、学校行事にも積極的に参加させて頂いた。昨年と同様、コロナ禍であったが、教育実習生を受け入れ、温かく見守ってくださった校長先生をはじめたくさんの先生方に感謝の気持ちで一杯である。

実習を終えて、大きな達成感と少し自信を持てた。3 週間という短い期間であったが大変多くの学びがあった。その中で特に学んだ事を 2 点挙げる。1 つ目は、「生徒理解の難しさ」。2 つ目は、「授業作りの難しさ」である。

まず、「生徒理解の難しさ」について述べたい。生徒指導とは、正確な生徒理解を行った上で行われるべきであると実習中に感じた。その生徒理解を行うには、生徒一人ひとりに合った言葉かけを行い、コミュニケーションを取っていく必要があると感じた。また、生徒がどのような気持ちなのかを正確に理解する力も必要だと分かった。特に、生徒への言葉かけが難しかった。生徒の気持ちに共感するだけでなく、時には生徒の為に厳しい言葉もかけていかなければならない。この事から、教師には、観察力と責任感、忍耐力が必要だと思った。

次に、「授業作りの難しさ」である。私は 8 回程授業をさせていただく機会があった。私の授業は、生徒が分かる授業になったかどうかは分からない出来であった。そして、自分自身の知識不足を痛感した。授業を作る際には、明確な授業の目標をしっかりと立てる事が大切である。何を学ぶのか、そのためにはどういう教材が必要か、どのように板書をするか、どのタイミングでグループワークを行うかを考える必要がある。さらに、自分の使用した教材やグループワークなど生徒にとってどのような効果があるのかを考える。そして、授業中に机間指導を行い、生徒の表情を確認し、授業が終了すれば課題点を挙げる。それをもとに次の授業に活かす。教師も生徒と同じように、日々学び研究を積み重ね、指導力を磨き続けなければならないと感じた。

教育実習は、不安と緊張、悔し涙を流す場面があったが、凄く自分を成長させる期間であった。元気いっぱいの優しい生徒達とたくさんの暖かい先生方に支えられ、実習を終えたという事を忘れずに、教師になって活かしていきたいと思う。

教育実習を終えて

国際教養学科 4 回生

田 神 希 咲

3 週間という短く貴重な期間で、私は多くの発見と学び、課題を得ることができた。この実習で得ることができた最も大きな収穫は、以下のことである。

それは、実際の学校現場の状況を踏まえた、現実味のある考えができるようになったことである。実習前は、大学の講義で得られる知識をもとに、学校現場の課題や、より良い指導法を模索していた。しかし、教育実習で実際の学校現場に赴いたことで、これまでの私の考えは「机上の空論」であったことに気付いた。「生徒に、英語をもっと好きになってもらえるには、どのような授業を教員は行うべきか？」という問いに対し、実習前は、「ただ楽しい授業を行えばいい」と考えていた。もちろん、楽しい授業も魅力的である。しかし教育実習中、楽しさだけでは子どもたちのためにならないと痛感した。実習中、先生方からよくご指摘を受けたことがある。それは、「授業目標を生徒に達成させることが、第一優先である」ということだった。このようなご指摘を得たことで、子どもたちに対して教員が背負う、学びへの責任が大きいことが分かった。ただ楽しいだけでは不十分で、楽しい上に、確かな学力を獲得できることが、子どもたちにとって重要であると学んだ。そのご指摘を受けた後、実際に実習授業で、授業の目標を念頭に置きながら、目標文法を何度も子どもたちと一緒に発音したり、文法事項を使用したアクティビティを取り入れたりした。そうすると、子どもたちから「この文法を自分で使えるようになって、嬉しかった」や「先生の授業、もうちょっと〇〇した方が、もっと面白くなると思う」と、生徒たちから直々に授業のアドバイスを聴くことができるようになった。生徒からのこのようなポジティブなフィードバックは、目標を念頭に置いた授業ができたからこそであると今になって感じている。

今回の教育実習は、楽しいだけではなく、様々なことに悩んだ期間でもあった。上記のような、大変大きな収穫を得ることもできたが、生徒の成長をサポートするため、どのような言葉掛けや振る舞いが教員として望ましいのか考えることも多くあった。ここで私が学んだことは、実際に目の前にいる生徒との関わりを通して、一人ひとりにあった対応を考えることが大切だということだった。全員に共通する適切な振る舞いなどは存在せず、目の前の生徒に真正面から向き合うことで、子どもたちに対する気付きや新たな考えを導き出すことができると学んだ。

今回の教育実習での経験を生かし、教員になった際は、すべての子どもたちへの寄り添いを大切にし、生徒たちを温かく包み込むような教員を目指したい。大学でお世話になった先生方や友人、これまで支えてくれた家族への恩返しのつもりで、来年度から教員として日々頑張っていきたい。

最後にはなるが、3 週間の教育実習は、私にとって大変有意義な時間であり、私をより成長させてくれた、大切な期間であった。これから出会う子どもたちに、この教育実習で得たことすべてを活かしながら、より良い教育を届けていきたい。

教育実習を終えて

史学科 4回生

那 須 あかり

私は、姫路市の中学校で3週間教育実習生としてお世話になりました。実習期間中は日々学ぶことばかりでした。

授業は1年生の社会科・地理の気候帯を担当しました。日本近世史のゼミに所属していたため、地理分野の担当を言い渡され、緊張したことを覚えています。1年生6クラス中5クラス、週3時間、5単元の担当に加え、道徳1時間、合計26時間教壇に立ちました。

実習1週目は研修も多く、生徒と関わる機会は生活ノートの日記を通じてのみでした。しかし、生徒との距離を縮めるために、休み時間はなるべく担当クラスに顔を出し、朝学活の前には担任より早く教室に向かうなど工夫をし、コミュニケーションが取れるように意識しました。また、話しかけてもらうのを待つのではなく、私から生徒に話しかけるよう心がけました。

授業は生徒に助けられることがしばしばでした。私は、大勢の前で話すことがあまり得意ではありませんし、私に視線が集まるのも苦手です。しかし、授業をするとすると、そのようなことも言ってもらえません。まずは堂々と教壇に立ち、大きな声で自信をもって話すことを意識していました。実際に授業をしてみると、自分の授業準備の不足や発問に対する生徒の答えへの問い返し、板書の書き方など不十分なことばかりで、まだまだ未熟であると感じました。特に発問は課題です。私は、発問で抽象的な言葉を用いていたので、授業が盛り上がりず、生徒も戸惑った顔をしていました。しかし、その後の反省で指導教諭から「発問を具体的に」とアドバイスをいただいたことに加え、授業見学で学んだ「生徒の日常生活と結びつけた」発問を意識すると、前回の授業よりも生徒の反応が良くなりました。回数を重ねる度に少しずつ心に余裕も生まれ、自分自身が楽しんで授業をすることができました。また、自己の成長も感じることもできました。

私は、この実習に行く前は、なにもかもが不安で、3週間きちんとやりとげることができるか心配でした。しかし、実習を通して教師と言う仕事のやりがい、楽しさ、そして子どもたちの将来に対する責任、全てをひっくるめて私は教師になる決意が新たにできました。

丁寧であたたかいご指導をしてくださった指導教諭や諸先生方、私の授業を一生懸命聞いてくれた生徒たち、そしてともに実習をおこなった実習生に囲まれた実習でした。恵まれた環境のなかで教師という小学生の時から夢を叶えるための第1歩を踏み出すことができ本当に幸せでした。

これから教育実習へ向かう皆さん、思う存分実習を楽しんでください。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

川崎野恵

「教師はとても大変だけど、あなたみたいな生徒に出会えるから面白い」私の恩師がこの言葉をかけてくれた時、私は教師になることを決意しました。教師になりたいと思い続け、多くの人に力を貸してもらいながら、教育実習という1つのスタートラインを終えることができたことを幸せに感じています。

今の私には何ができるのかと不安を抱きながらのスタートでしたが、「何かすることはありますか？」と尋ねるのではなく、全て自分で気づき・考え・実行することを目標にしました。「こんなことをやってみたい！」と思う私の気持ちに、児童のみんなや先生方は全力で答えて下さいました。研究授業では、多くの先生方が足を運んで下さり、事後研修でも様々なアドバイスを頂きました。足りなかった部分が多くあったことに気づき、家に帰ってからうまくできなかったと落ち込みましたが、なぜ自分に足りていない部分を伝えて頂いたのに、落ち込んでいる自分がいるのか考えてみました。それは人から頂いた言葉を100%受け入れることができていない自分の弱さです。教師を目指す前に、私は1人の社会人として生きていく義務があります。社会人になった時、人から頂いた言葉を全身で受け止めることができなければ、私がどうあがいても成長できないと思います。人の成長に関わる教師という職業を志すのであれば、まずは周囲の方が私に与えて下さるたくさんの言葉と向き合うようにしなければいけないと、研究授業を通して気づくことが出来ました。

また、私は母校での実習だったため通いなれた道を歩いていると、地域の方が「教育実習生？頑張れ！」「今日もお疲れ様。おかえり！」と温かい声をかけて下さいました。自分がどう生きていきたいのかを考えることも大切ですが、どこで生きていきたいのか、場所にこだわることも感謝の気持ちを形として表していく手段だと感じました。そして実習の最終日には、担当の先生が目に涙を浮かべ、私と抱き合ってくださいました。児童のみんなの成長、先生と交わした言葉を思い出すと胸がいっぱいになり、私も涙が出ました。教育実習生を受け入れ、指導する時間を設けてもらうことは容易なことではないと理解しています。そんな中で私と真剣に向き合い、私の夢に寄り添って下さったことに心から感謝しています。泣いてくれる人がいて、泣きたくなる自分がいるのが本当に幸せです。

1カ月の教育実習は、「思い出したら頑張れる」そんな素敵な出来事で溢れています。小学校の卒業文集で綴った「将来は150歳くらいまで長生きして、元気いっぱいの小学校の先生になる」という私の夢は、今は目標が変わっています。夢は声に出すと自分の意思に変わる、その意思は自分を強くする、そう信じて自分自身の道を切り開いていきたいです。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

小野寺 美 春

たくさんのやりがいと成長、課題を見つけることができた1ヶ月間の教育実習は、私にとってかけがえのない、貴重な経験となりました。

まず、身をもって感じたことは「教える」ということの難しさです。人生で初めて小学校の教壇に立ち、人生で初めて児童の前で行った45分間の授業は、緊張と不安から気持ちが先走り、思うように言葉が出てきませんでした。また、時間内に授業を終わらせることへ集中してしまったり、自分の指導案通りに授業を進めようとして、児童の意見を遮ってしまったり、いつの間にか児童を中心とした授業ではなく、自分本位の授業になっていました。そんな時、担当指導教員の方が、「子どもたちから出る言葉や考えを、教師が大切に拾って、授業に取り入れていくことが大切だよ。」と教えていただきました。この言葉を聞いて私は、もっと児童に耳を傾け、児童が主役となる授業になるよう、一回一回の授業で意識付けを行いました。すると、初回の授業に比べ、児童の積極的な発言が飛び交う活気的な授業へと変化していることを実感しました。さらに、児童の成長と共に自分の成長、達成感を感じることができるようになり、教壇に立って児童の前で授業を行うことが、とても楽しいと感じるようになっていました。このように、自分の理想の教師像や理想の授業を目指して少しずつ意識して、少しずつ変えていくことの大切さや、児童を主体としてみんなで一つの授業を作り上げていくことの大切さを学びました。また、教師の頑張り次第で、子どもたちからの反応や学びは大きく変わるのだと実感しました。自分の努力が目には見えなくても、子供達の成長や反応から感じることでこの教師という職業に、大きな魅力を感じることもできました。

授業以外でも、学校生活において先生方や児童からたくさんのことを学ばせていただきました。児童の間でトラブルが起きた時、1人の対応に必死になり、他の子や周りの状況まで把握することができなかったり、1人の意見や発言を鵜呑みにしてしまい、両者の気持ちをしっかり聞いて対応することができませんでした。しかし、先生方の対応の仕方や適切な声掛けを実際に見て学び、教師は常に視野を広く持ち、様々な角度から冷静に物事を判断する力の必要性と重要性を強く感じました。

短期間ではありましたが、子どもの成長を共にする喜びと達成感を感じることができました。また、新たな自分への課題に直面したり、不安や緊張が募る大変な経験の中、たくさんの先生方と子どもたちに支えられながらこの教育実習を終えることができました。このようなことから、周りの人への感謝の気持ち、人と人との繋がりをこれからの人生の中で大切にしていきたいと強く思いました。さらに、教師は常に学び続け、常に自己の人格形成のために絶えず努力をし、子どもと真摯に向き合う姿勢を忘れてはならないということを感じました。このような学びと経験は、私にとって一生の宝物です。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

山田陽穂

私の教育実習は長いようで短く濃い1か月でした。いつになっても思い出すと胸が熱くなると思います。実習生は私1人でしたが、指導教員の先生を含め先生方が相談にのってくださいました。子どもたちも先生方も優しく、私はすごく人に恵まれていると感じました。

教育実習が始まる前の1週間は、不安でいっぱいでした。実習が始まり授業を頑張っている友人を見て、後れを取っていると思っていました。また、実習が始まるのに何もできない状況に不安を感じていました。そんな緊張いっばいの中向かった母校は、すごく温かく素敵な学校でした。6年生を担当させて頂きましたが、他学年の子どもや先生とも関りをもつことができました。本当にかげがえのない時間を過ごせたと思っています。

実習が始まって2週目からは授業をさせて頂きました。初めて子どもたちの前でした授業は、頭が真っ白で体がこわばっていました。私が伝えていることはあっているのかと考えてばかりで、楽しむことができませんでした。子どもたちの反応が指導教員の先生のとときは全く違って、楽しくないだろうなと感じました。どうしたら楽しい授業ができるのかとずっと悩んでいました。3週目にした授業で、自分が楽しんでできたと思える授業ができました。その時に、指導員の先生は「すごくいい授業だった」とうるんだ眼で言ってくださいました。私が悩んできた日々を思い、自分のことのように喜んでくださいました。

子どもたちとは授業中や休み時間、掃除の時間に様々な話をして、1か月とは思えない関係を築くことができました。1年生とは違って、6年生は教室にいても話しかけに来てくれるわけではありませんでした。だから自分から話しかけたり、子どもたちの輪に入っていったりしました。だんだんと子どもたちから話しかけてくれるようになり、学級の一員として関わってくれてすごく嬉しかったです。最終日にはサプライズを用意してくれていました。サプライズとはいっても、何かしているのかなと感じるときは多く、全く知らなかったわけではありませんでした。しかし、私のために休み時間を削って準備してくれていることがすごく嬉しく、子どもたちからの愛を感じました。私が最後にあいさつをしたときは、涙を流して抱き着いてくれる子もいました。私も泣いてしまったけれど、すごく素敵な時間になりました。こんなにも温かいお別れになったのは、子どもたちと良い関係ができたからだと実感します。

最終日の放課後は、指導教員の先生とも涙をこぼしながら話しました。本当によく頑張ったと言って頂き、自分でも頑張ったと思うことができました。また、私が「人に恵まれている」と感じていたことを、「人に恵まれているのではなくて、山田さんの頑張りがひきつけていると思うよ」と言ってくださいました。また、「実習に来てくれたのが山田さんで良かった」とも言ってくださいました。その言葉がとてもうれしくて、その時の場面を含めて鮮明に覚えています。頑張ってよかった、頑張りが届いて嬉しいと思いました。

実習を通して、音楽会に向けて練習を頑張る様子や、成長していく子どもの様子を見て、改めて教師になりたいと思いました。お世話になった先生方のように、子どもたちと学び続け、楽しい日々を過ごしたいです。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

十川 佳穂

私は4週間、母校の小学校で教育実習をさせていただきました。教育実習が始まる直前までは、「子どもと仲良くなれるのかな」「授業はうまくできるかな」「大変なクラスと聞いているけどどうしよう」という不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、実習が始まると徐々にその不安はなくなり、逆に子どもたちにたくさん励まされ、助けてもらいながら実習を終えることができました。このような貴重な経験からたくさんのことを学び、特に二つのことが印象に残りました。

一つ目は、指導を担当していただいた先生をはじめとする職員の皆さんの温かさです。私の指導担当の先生は、提出した指導案を添削するのではなく、「一度一緒にやってみよう。」と言って一緒に細案を書いて下さる先生でした。指導担当の先生と教室で実際に流れを確認することで、授業の内容だけでなくチョークの持ち方から板書の文字の大きさのことまで、多くの学びがありました。3週目から授業を始めたのですが、その時に指導担当の先生が1週間お休みされることになり、指導案を見ていただくことができませんでした。その時も、校長先生や特別支援学級の先生に声をかけると、夜遅くまで指導案や教材づくりを一緒に取り組んでくださいました。研究授業が終わった時には、写真付きでよかったところや悪かったところを書いた紙を下さり、次に生かそうという前向きな気持ちになることができました。

二つ目は、一人一人違う個性を持った子どもたちとの出会いです。私は2年生の担当でした。初対面の時から積極的に話しかけてくれる子や、失敗しても粘り強く取り組む子、甘えん坊な子など一人一人違っていました。どの子と話してもとても楽しく、活発な子たちが多くとても刺激になっていました。実習の序盤では、話しかけてくれる子どもばかり話していましたが、自分からほかの子どもに話しかけてみると、たくさんの言葉が返ってきたり、その時は話せなくても徐々に話しかけてくれるようになってきたので毎日いろいろな子どもと話すことが楽しみでした。授業前に「先生がんばれ！」と応援してくれる子、机間指導をしているときに「私発表したいからあててね。」と言ってくれる子、喧嘩が起きた時の対応で困ったときは、「そっとしておいたら機嫌治るよ。」と教えてくれる子、4週間という短い期間の中でも、子どもとのコミュニケーションを深めることができたことがとてもうれしい出来事でした。

昨年から引き続き、コロナ禍で学校現場が大変な中、実習を受け入れてくださった母校の職員の皆さん、何より私を受け入れてくれた子どもたちに感謝の気持ちでいっぱいです。これまで「教師の仕事は大変」、「自分にはできない」と思うこともありましたが、子どもの笑顔を見て、子どものために努力できる教師になりたいと思えました。この経験を生かして、本当の教師になれるように努力していきます。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科 4回生

河野 朱里

4週間の幼稚園教育実習は、私にとって毎日が新鮮で、とても有意義な時間でした。どんな学びがあるのだろう、どんな子どもたちに出会えるのだろう、そう思いながらとてもワクワクしたのを覚えています。実習の初日は不安でいっぱいでした。日を重ねるうちに、早く子どもたちに会いたいと思い、明日はどんなお話を聞かせてくれるのかな、明日も元気に登園してくるかな、などと感じることができ、私自身が実習を楽しむことができていました。そのような有意義な実習を過ごすことができた中で、非常に印象的であったことを2つ述べたいと思います。

1つ目は子どもとの関わり方です。年中さんのクラスで実習をさせていただいていた際に、スムーズに登園するのが難しい子どもがいました。毎日名前を呼びながら話しかけるように心掛け、一人ひとりの個性に向き合い、その子の雰囲気に合わせて、ゆっくりと時間をかけて関わるようにしました。そうしているうちに、ある日担任の先生から、「あかり先生がいるから今日は行く！と〇〇ちゃんが言って幼稚園に来たんです。」と保護者の方からお伝えがあったという話を聞きました。その話を聞いた時、感動が込み上げ、胸がいっぱいになりました。私にとっては些細な心掛けでも、その子にとっては、小さな勇気に繋がり、幼稚園が少しでも楽しいものだと思うことができたのだろうと感じました。この出来事から、子どもとの関わり方を改めて考え直すことができ、名前を呼びながら一人ひとりと丁寧にゆっくりと関わり、幼稚園が楽しくて安心することができる場所だと思うことができる環境を作りたいと思いました。

2つ目は子どもの気持ちに共感することです。子どもの行動に対して、褒めたり注意をしたりする場面があると思います。その際に、嬉しいね、楽しいね、痛かったよね、悲しい気持ちになったね、など気持ちを想像し共感することで、理解してくれる存在なのだと安心でき、認めてくれるという愛情も感じることもできると思いました。実習で保育者がこのような声掛けをしている姿を見ていたからこそ、子どもと保育者には信頼関係が成り立っていると感じるとともに、そのようになりたいと強く感じました。

大学では学ぶことのできないことも、実習を通して多くを学ぶことができました。この4週間、毎日が新鮮で新しい発見や気づきがたくさんありました。日々、素直でかわいい子どもたちの成長を間近で見ることのできる素晴らしい職業だと、改めて感じることもできました。4週間、様々な経験をし、充実した実習を行うことができたのは、保育者の方や子どもたち、大学の先生方、支えてくれた家族のおかげです。この感謝の気持ちを忘れずに、実習での経験を活かし素敵な幼稚園教諭になり、恩返ししたいと思います。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科 4回生

松 田 麻 里

4月19日から12月16日まで約1年間を通して、20日間実習に行かせて頂きました。コロナウイルスが完全に終息していないにも関わらず、実習に行かせて頂いたことに非常に感謝しています。

私は、5歳児クラスに入らせて頂きました。また、実習生の間で分担し行う全日実習、部分実習を2回経験し、多くのことを学びました。まず、子どもが活動に参加したい・やってみようと思えるような声掛けを行うことです。教師が子どもに一方的に声を掛けるのではなく、子どもに問いかけながら活動の内容を説明することで、子どもの興味関心を引き出すことができると学びました。また、指導案作成のときや事前のシミュレーションのときに、子どもの反応や行動など様々な場合を想定し、準備しておくことで焦ることなく臨機応変に対応できると学びました。授業では指導案の書き方を習っていたが、実際に書くと今回の活動で子どもに一番何を伝えたいのかなど明確に書かれていない部分がありました。短い活動の指導案でも、細かい部分まで書くことで、子どもに伝えたいことが明確になりスムーズに活動が行えると感じました。幼稚園教育実習では、附属の幼稚園へ行かせて頂くため、1クラスに5、6人の実習生がいます。多くの実習生がクラスにいることで、部分実習などお互いの指導案や活動の様子を見ることができ、教師として何が必要なのか、教師の動き方など部分実習をしている側だけでなく、見ている側の実習生も学ぶことができました。

1年間を通して行かせて頂くため、運動会や誕生会、園外保育など様々な行事を経験することができました。また、運動会で行う竹太鼓や竹馬など子どもの練習する姿を見て、先週までできなかったことが、できるようになっているなど子どもの成長を感じることができました。また、「できないからやらない」のではなく、子ども一人一人が「絶対できるようになる」という強い気持ちを持ち練習に取り組んでいる姿があり、できるようになったときに子ども同士で喜びを共有し合うなど子ども同士の関わりでも成長を感じることができました。

教師と子どもとの関わりでは、5歳児に適した声掛けが大事だと感じました。5歳になると、子ども同士で話し合う力がついてくるため、教師が全て決めるのではなく、子どもたちが話し合って決める時間を設けることも大切だと学びました。また、子どもの些細な言葉にも耳を傾け、活動の中に取り入れることで、子どもの興味関心に沿った活動ができ、子どもが主体的に参加できるのだと感じました。

実習で学んだこと感じたことを活かし、これからも一生懸命努めていきたいです。私たちの実習を受け入れてくださった神戸女子大学附属高倉台幼稚園の先生方に非常に感謝しています。ありがとうございました。

教育実習を終えて

家政学科 4回生

清水 桃花

私は母校である大阪府の高等学校に3週間教育実習に行きました。コロナウイルスで出来ていなかった体育祭も3年ぶりの開催でした。私の母校では体育祭の期間に合わせて教育実習があるのでとても楽しみな気持ちが半分、3週間きちんとやっつけていけるかどうか不安な気持ちが半分の状態で教育実習を迎えました。

この教育実習を通して感じたことは教員という仕事は大変だけれども、他の仕事では感じられないほどのやりがいを感じる事が出来るということです。1コマ50分の授業に対して何倍もの時間をかけて授業準備をし、それでもうまくいかず落ち込むこともありましたが生徒は「今日学んだことをこんなことに活かしたい」、「こんなことを知れてよかった」などという感想を伝えてくれて大変だったことも忘れてもっと頑張ろうと思えました。体育祭ではどの学年も初めての体育祭という状況にも関わらず3年生は下級生を引っ張っていく為に頑張っていました。そんな姿を見ていると私までも励まされる気持ちにもなりました。この教育実習ではたくさん生徒たちに励まされたなと感じます。

これから教員になるにあたって意識していこうと思ったのは「一人一人をよく見て知る」ということです。実習中は学年、クラスに問わずたくさんの生徒とコミュニケーションをとりました。コミュニケーションをとっていきうちに知らない一面を知ることができたり、色々な子がいると感じることもできました。担当クラスにどの教科でもすぐに寝てしまう子がいたので積極的に話しかけてみました。すると、ただだらけているだけではなく様々な背景があることも知りました。これからたくさんの生徒たちと関わっていく中で色々な生徒と出会うと思います。そんな時は生徒をしっかりと普段からみて生徒のことを知ろうとしていきたいと思いました。

この教育実習ではたくさんの先生方にもお世話になりました。担当の先生は忙しいにもかかわらず何度も授業を見てくださいました。家庭科教員として意識していることやアドバイスなどをたくさん教えてくださいました。私が所属していた部活動の先生、私の1年生・2年生の時の担任の先生などお休みにもかかわらず研究授業に来てくださった方もいました。これだけ支えていただいた分「必ず教員になる」という気持ちも高まりました。

教育実習が始まる前は早く終わらないかなと思っている部分もありましたが、いざ始まってみると毎日学校に行くのが楽しみな3週間で終わってほしくないという気持ちに変わっていました。大変なこともたくさんあると思いますがこの教育実習で得たことを忘れずに春から教員として頑張っていきたいと思います。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程 4 回生

吉 竹 真愛美

教育実習が始まる前は、子どもたちに会える楽しみと同時に、緊張と不安もありました。しかし毎日新しい学びがあり充実した1週間を過ごすことができました。私が栄養教諭の教育実習で感じたことを2点述べたいと思います。

1点目は、1つの授業を作るのに多くの知識と技術、時間を要することです。私は「あの時の教育実習生の授業楽しかったな。」と思い出してもらえるような記憶に残る授業にするために2カ月前から指導案を書き始め、栄養教諭の先生とメールでのやり取りをさせていただきました。大学での模擬授業は数回しかやっておらず、実際子どもたちを対象に作るのは緊張しました。実習校の丹波地域は食が豊かな地域であるため、研究授業では有名な特産物“黒豆”に焦点を当てました。他の地域と違った黒豆の特徴や黒豆以外にも特産物があることを取り上げ、『自分たちの住んでいる地域は食の魅力が溢れていることに気づかせ、地元愛を持った子どもを増やす』ことをねらいとしました。授業を作る際、「他の地域の黒豆と大きさや重さが違うことを授業の山場にしたい。」と相談したところ、実物を使うのはどうかとアドバイスしてくださいました。実際茹でた2種類の黒豆を1粒ずつ白い画用紙に並べたり、同重量の容器に各種類同じ粒数入れて秤で量るなど、大きさや重さの違いを可視化させたことで子どもたちは分かりやすいと言ってくれました。授業に実物を用いることで関心は高まり、分かりやすく楽しい授業を作るには多くの指導技術と知識を要することが分かりました。

2点目は、時間が限られているということです。これは教育実習へ行ってより強く感じました。日中は授業に加えて休み時間に次の授業の用意をしなければならず、気が付けば放課後になる毎日でした。そのため翌日の授業準備などの事務作業は子どもたちが下校した後にやらなければならず、多くの先生方は夜まで残っておられました。また実習校の給食はセンター方式であったため、栄養教諭の先生は午前中給食センターへ調理状況の確認に行かれ、配送が終わった段階で所属校以外の給食を提供している学校に食育の授業へ出向かれ、放課後に学校で指導案の作成などの事務作業をされていました。給食がセンター方式の場合、提供している他の学校へも指導に行くため所属校に滞在できる時間は限られていることが分かりました。

実習が始まるまでは、1週間と言う大変短い期間で子どもたちと距離を縮めることができるのか不安でしたが、皆温かく迎え入れてくれました。教育実習の最終日に1人1人が書いてくれた手紙とともに「頑張って先生になって戻ってきてね!」と言ってくれた言葉が、将来栄養教諭として子どもたちに関わっていきたいという私の思いをより一層強くしてくれました。最後になりましたが、お忙しい中、丁寧にご指導くださった先生方には改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

栄養教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科 4回生

由谷 絢奈

栄養教育実習を終えて、食に関する教育の奥深さについて感じる事ができました。一人の栄養士、一人の教育者として栄養教諭に必要な知識や技術を吸収することができた五日間でした。最も印象に残っているのは学校現場における食育の大切さについてです。実習校の先生は食育にとっても力を入れている先生だったので、学校給食を「生きた教材」にするために様々な工夫をされていました。中でも特に一番印象に残っている食育活動は、一年生の生活の時間においてのとうもろこしの皮むきです。一年生が皮をむいたとうもろこしはその日の給食に取り入れられており、普段とうもろこしを食べない児童が、今日のとうもろこしは自分で皮をむいたから食べると言って食べていました。私はその姿を見てとても感動しました。もしとうもろこしの皮をむく体験をしていなかったら、その児童は食べなかったかもしれないと思うと、学校現場における食育体験は児童の食習慣を形成するのだと改めて感じました。ほかにも食に興味を持ってもらえるような工夫において、ハートにくり抜いたにんじんがいくつか入っている「ハッピーハート」や、茶摘みの歌を習った学年があったときには茶飯を献立に取り入れるなど、たくさん施されていました。また、一年生の食育の授業での「ごま油があるから、ごまと油は同じ働き」、「豆腐は大豆からできているから同じ働き」という発言から、給食だけでなく、食育の授業はもちろん、食育だよりや栄養に関する掲示物、調理室を覗くことができる環境、給食献立に関する校内放送など、日常生活の中で食についての知識を吸収できる環境が整っていると感じました。この一つ一つの積み重ねで、食に対しての知識を吸収し身につけ、日常生活に活かすまでが「食育」であると感じました。このような、食に興味を持ち知識が吸収できるような環境を整えることが栄養教諭のいちばんの大きな役目であると感じました。

研究授業をさせていただくにあたって、臨機応変に対応する力が必要であると感じました。研究授業の前日に、授業クラスの担任の先生から、「授業は生物」ということばを仰っていただき、今でも心に残っています。私は調べ学習に時間がかかると想定し、導入を早めに進行し、調べ学習の時間を多く設けようと考えていたのですが、実際は、調べ学習はすぐにできてしまい、時間を少し持て余す児童もいました。そこから、臨機応変に指示を出す力が必要であると感じました。そのほかにも授業をするにあたって、日頃の児童一人一人とのコミュニケーション、指授業の進行と学習規律のバランスなどが大切であると感じ学びました。

短い期間の教育実習でしたが、児童の記憶に残るような食育は、これからの食生活の基盤を作り、自己管理能力に繋がると強く感じる事ができました。この教育実習で臨機応変に対応する力が不足していると感じたので、教育の観点だけでなく、栄養士としての経験や様々な人とコミュニケーションをとる経験を通して養っていきたいです。

教育実習を終えて

看護学科 4 回生

西門前 ほのか

3 週間の養護実習を通して、養護教諭は生徒一人ひとりの健康を守るため、生徒だけでなく担任の先生や学校医、外部機関などとの連携の中で必要な情報共有を図り、生徒の特性に応じた適切な保健指導につなげる役割があることを学びました。また養護教諭は学校全体の保健活動を遂行するリーダーシップ的機能を担い、学校の年間保健計画が滞りなく進むように先生方に協力を依頼したり、疑問点があれば他校の養護教諭に相談して解決に導くというような行動力が重要になることも分かりました。

保健室に来室する休養者及び普段の学校生活における生徒の関わりについて、生徒の主訴に耳を傾けつつ、養護教諭の専門知識に基づき客観的情報も含めアセスメントして対応する必要があることを学びました。現在実習校では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために原則早退を促すこととなっていました。そのためこの状況下においては、体調不良を訴える生徒にただ単に早退を促すだけでなく、その体調不良が精神面からくるものではないかという視点をもって見極めることが重要になってくることが分かりました。また養護教諭の観察力だけでなく、担任や部活動の顧問の先生方との情報共有を通して日常的に生徒の様子を把握しておかなければならないことも強く意識しました。生徒とのコミュニケーションに関しては、外傷や頭痛・腹痛など、生徒の訴える・目に見える症状を受け止めつつ、その痛みの背景にある本人の思いを汲み取ることが大切だと考えました。新型コロナウイルス蔓延下でなければ、すぐに早退を促すことなく校内での休養も可能であるため、校内で小休憩をとった後に授業に戻るように促すか、校内で休養させるよりも本人が落ち着ける環境(自宅等)に帰す方がよいのか、見極める必要があります。そのため、保健室に来室した生徒がリラックスして思いを打ち明けられるような保健室の環境づくり、雰囲気や声かけというようなコミュニケーション能力が養護教諭に求められる素質であることに気づきました。

私は高校卒業後、楽しかった思い出だけでなく、辛かった部活動や勉強を含めた高校時代がとても充実していたということを実感しました。それと同時に、全ての高校生が私と同じように、高校卒業後に「とても充実した高校生活だった」と心から思えるよう、疾患を抱えながら学校生活を過ごしている生徒や、友人関係や勉強面で不安を抱えている生徒に寄り添える存在になりたいと考え、養護教諭を目指しました。今回の実習で実習校の養護教諭が生徒の対応をしている場面を何度も目にする中で、「私もこんな養護教諭になりたい」という思いが強くなりました。実習校の養護教諭のような、常に生徒の立場に立ってその生徒の健康を守るために行動できる養護教諭を目指して、今後も勉学に励みたいと思います。

幼稚園教育実習を終えて

幼児教育学科 2 回生

藤 田 晴 菜

私は5月30日から6月17日までの3週間、地元の公立幼稚園で幼稚園実習をさせていただきました。私は人の前に立って話すことが苦手で、とても緊張していました。

初めの3日間は観察をさせていただき、幼稚園の一日の流れ、先生の子どもとの関わり、子どもが降園した後の先生の仕事などを観察し、幼稚園はどういった場所なのか知ることができました。観察をしながら子どもと関わる上で、どのように接したらいいのか戸惑いながらも子どもの遊びに参加し、「○○ちゃんはこのところが素敵だね」と声掛けをし、子どもと打ち解けあえるよう努力をしました。そうすると徐々に子どもから「ふじたせんせい、これしてあそぼう」と声を掛けてもらえるようになりました。

子どもと少しずつ仲が深まってきた頃に部分実習をさせていただきました。朝の会、お昼、帰りの会と分けて部分実習をさせていただいたので、事前準備を十分してから臨むことができました。初めは緊張し、ただ進めることに必死になり、周りを見て動く余裕がなかったのですが、部分実習を何度もやっていくうちに、少しずつ前に出て話をすることに慣れ、周りの状況を見て臨機応変に動くことができるようになりました。初めは活動と活動の間に時間ができた時、緊張のあまり棒立ちになってしまいましたが、最終週に近づくにつれて手遊びをしたり、ピアノを使って歌ったり、子どもが待つ時間がないように考えて行動をすることができるようになりました。

最後の5日間では、毎日全日実習を任せていただき、設定保育は何をしよう、失敗したらどうしようなどの不安はありましたが、それ以上に子ども達はどんな反応をするかな、こんな反応をしそうだからこれをやってみようなど、予想しながら指導案を立て、それを実践することが楽しみになっていました。実際に、子ども達も「今日はどんなことするの?」「昨日したことまたしたい!」と言ってくれるようになり、私も子ども達の期待に応えたいと教材研究を積極的に行いました。その中で最後まで自分の中で課題として残ったのは、片づけを促すことです。自由遊びをしていて、片付けの時間になった時、気持ちの切り替えが難しく、まだ遊びたいという子どもへどう声を掛けたら良いのか分からず、毎日試行錯誤しながら声を掛けましたが、なかなか克服することができませんでした。そのままでは実習を終わらせられないと思い、担任の先生に質問すると「いきなり片付けの時間だと知らせるのでなく、15分前くらいから5分刻みに片付けの時間を予告するのはどう?」と、助言をいただきました。片付けの時間を予告することで、片づけを意識しながら遊び、子ども達が自分で片付けの時間を気付くようになることを教えていただきました。私が保育者になった時、実践しようと思います。

この幼稚園実習を通して、たくさんの学びを吸収することができました。また、保育者になりたい、子どもと関わる仕事に就きたいという思いが強くなりました。今後も子どもと共に成長していき、日々学びを得ていく保育者になれるよう頑張りたいと思います。

幼稚園教育実習を終えて

幼児教育学科 2回生

圓尾美侑

私は3週間の教育実習を通して、保育をするうえで大切なことを沢山学ぶことができました。幼稚園での実習は初めてで、幼稚園ではどのような生活をしているのかを知るところから始まりました。また、初めの方は緊張感がありましたが、登園して子どもに挨拶をすると、笑顔で挨拶を返してくれてほっとした気持ちになりました。そして、一つずつ頑張っていこうという気持ちになりました。

保育者の子どもとの関わり方から学んだことで、保育者は一つ一つ子どもたちが主体となって活動することができるように、子どもたちと一緒に考えて、話をしたりして、ただ一方的にすることを伝えたり決めたりすることが保育では無いということ学びました。

また3歳児と4歳児と5歳児では、生活の仕方や遊びの仕方が全然違うということもこの教育実習で学ぶことができました。年齢が上がるごとに友達と協力したり、共感したりする力が育まれていました。子ども同士の生活では、時には自分の思いや考えが周りどぶつかってしまうという場面も見えました。そんな時、保育者は一人ひとりの思いを聞き、共感したり寄り添ったりしながら、どうすればよいのか子どもたちと一緒に考えるようにしていました。声の掛け方や関わり方一つでも工夫することができるし、その工夫一つで子どもの成長のきっかけになるのだと学びました。

子どもたちへの声掛けについては、子どもたちが楽しく活動や生活ができるように、保育者が動物になりきって子どもたちに対応していました。活動するうえでの世界観を大事にすることは大切ということを知り、ただ「～してね」などの声掛けではあまり良くないということも実感しました。

保育は全ての活動が繋がっているということ学び、その繋がりを大切にしながら日々の活動や生活をしていくことが重要なのだと思いました。今回の教育実習は運動会の時期でした。運動会前から運動会で行う競技や活動の話を子どもと一緒にしたり、運動会が終わった後も年齢に関係無く、みんなで楽しんで遊ぶ姿から、行事のためでなく毎日の遊びが繋がって大切にする事で子どもの活動の幅が広がり、成長にも繋がるのだということが分かりました。

また、この教育実習の中で、自分の課題を見つけました。それは、周りのことを良く見て自分から行動するという事です。何か言われて動くということは誰でもできることなので、自分から動けるように、視野を広くもち行動することをこの実習でもだんだんと意識するようになりました。

実習を通して、子どもが楽しく園での生活を送ったり、運動会などの行事を行ったりするには、保育者が環境を整備したり、日々子どもへの適切なタイミングでの声掛けをしたり、繋がりを大切にしながら日々のねらいに向かって保育していくことが重要だと学びました。部分実習と研究実習で学んだことや経験を生かして、これからも頑張ります。

学校園ボランティア活動を終えて

教育学科 2 回生
園 生 美 咲

私は、6 日間神戸市の小学校でインターンを行いました。実際に学校現場に行くのは初めてだったため不安と緊張でいっぱいでした。自分自身が児童の立場としてではなく教師の立場になって行動することの大変さを痛感しました。6 日間の学校インターンシップでたくさんのことを学びました。朝のあいさつ運動では大きな声で挨拶してくれる児童にとっても元気をもらいました。少し元気がない児童がいたら教室に入ったときに声をかけたりすることができるので、何気なく行っていることでもきちんと一つ一つに意味がある重要な活動だということに気づきました。休み時間は積極的に児童と遊び、授業だけでは見ることのできない一面を知ることが出来るためとても充実した時間となりました。消極的な児童には自分から声かけをしてコミュニケーションをとることで話しかけてくれるようになりました。

学校インターンシップでは、毎回違う学年に入ったので学年によって担任の先生の児童への接し方の違いを学ぶことができました。低学年の先生方は、児童の意見がまだまとまっていない状態でうまく話せなかったときにすぐに助け舟を出したり、相槌を打ちながら最後まで話を聞いて、リアクションを大きくするなど発表しやすい環境づくりをされていました。高学年の児童は先生に指示される前に自主的に動いたり、自分たちで注意し合ったり、給食準備や掃除ができていました。授業に集中できない児童や教室から飛び出していく児童への声掛けや対応はとても難しかったです。最初はどのように対応するべきなのかわからず何もできませんでした。そのことを担任の先生に相談すると、粘り強く実際にやってみるという積極性が大切だということを教えていただきました。

私が 6 日間の学校インターンシップで印象に残っているのはなかよし学級に行ったことです。なかよし学級では様々な活動をしていました。なかよし学級の 1 年生の児童は水遊びをしながら数字を探すといった遊びの中に勉強を取り入れていました。一人一人に応じた勉強法や活動のために先生方がたくさん工夫されていました。

大学に入学して教職を学ぶ過程で、自分はどうして教師を目指しているのか明確ではなかったのですが、6 日間の学校インターンシップで児童とのかかわりを通して、何事にも意欲的に取り組む児童を実際に近くで見ることができ、もっと児童の成長していく姿を見たいという思いが芽生えました。また、「先生毎日来て欲しい」や「先生次はいつ来るの?」とたくさん児童が話しかけてくれて、教師の大変さよりももっと児童とたくさん関わりたいという気持ちとやりがいを感じさせてくれました。この貴重な経験を小学校教師になるという夢を実現するためのモチベーションにし、3 年生の教育実習でも多くの学びを得られるよう努力したいです。

学校園ボランティア活動を終えて

教育学科 2回生

岡田 優香

私は約3か月間の幼稚園インターンシップで、4歳児と5歳児の2クラスを毎週交互に参加させていただきました。

最初は子どもたちと関わりたいけど積極的に行けず、距離を感じてしまうことがありました。しかし、登園時に子どもたちや保護者の方に自分から挨拶をしたり、保育活動で子どもから声を掛けてくれた時には子どもの気持ちを受け取り、笑顔で応答することを心掛けました。そうすると、私の顔や名前を覚えて一緒に遊ぼう！と誘ってくれたり、自由遊びで作ったものを見せて工夫したところを伝えてくれたりと、子どもたちの言葉をたくさん聞くことができました。子どもたちとの信頼関係を築くには時間がかかると思いますが、友達のように一緒に遊んだり、大人として子どもたちが困っている時に手助けをしたり、子どもたちの気持ちに共感し認めることが大切なのかなと感じることができました。

今回、保育活動を観察したり、子どもたちと一緒に参加させていただいたことでたくさん学ぶことができました。4歳児と5歳児で発達の違いがみられ、発達に応じた対応の必要性を感じました。5歳児の年長さんが外でおおり鬼をした時に中々捕まえられないという問題が起こっていましたが、一度みんなを集めて話をするなど自分たちで考え、問題を解決しようとする姿が見られました。4歳児では自分の気持ちを言葉で伝えたり、相手の気持ちを聞き取ったりすることは未熟ですが、時間をかけて育んでいくことが大切になると思います。状況に応じて援助していくことが子どもの成長に繋がるということに気付くことができました。そして子どもたちとの関わりだけでなく、プランターの移植や子どもたちが野菜を育てるための畝づくり、登降園の道に溜まった落ち葉の清掃など園内外の環境整備をお手伝いさせていただきました。3か月の間に様々な花の名前を教えていただいたので、子どもたちに尋ねられた時に答えられるようになりたいです。幼稚園で子どもたちと関わる以外の活動も体験させていただき、子どもたちが楽しく野菜や植物に触れ合えるのは教師の丁寧な準備や環境づくりがあるからこそだと感じることができました。

教師の援助では、子どもの気付きを促す言葉がけがされていて、教師がすべて伝えてしまうのではなく子どもが自分で考えて動くことを考慮されていることが分かりました。子どもがどこに躓いているかを把握しているからこそ教師は援助できるため、全体を見たり個々を見たりする両方が必要だと感じました。また子どもたちはどの活動も楽しそうに行っていたのが印象的でした。それは教師が子どもたちの意見に耳を傾け、してみたいことを実現できるように対応したり、活動で使う素材をしっかりと準備していたから子ども主体の保育を行うことができたのだと思います。

より良い保育になるための環境づくりや臨機応変な対応をするには自分の経験や知識がまだまだ足りないので、今回のインターンシップで感じたことを忘れずに今後も学び続けたいと思いました。

学校園ボランティア活動を終えて

教育学科 2回生

浄 西 莉 紗

私は、5月から始まった学校インターンシップに続き、同じ小学校でスクールサポーターをしています。学校インターンシップでは、1年生から6年生のサポートを週替わりで行い、なかよし学級も少し担当していましたが、現在は、なかよし学級の方をメインに活動をしています。担当教科や担当の子が決まっているわけではありませんが、私が義務教育コースで中学校英語免許の取得を目指していることもあり、英語の授業のサポートに入ることが多いです。7年ぶりに見た小学校の現場では、全校児童が一人1台パソコンを持ち、校内には英語ルームがあり、そこで英語の授業やテストが行われていました。わずか数年の間にも時代の変化があることに気付かされました。中学の英語免許を目指す私にとって、現場の英語の授業を実際にみることで、先生の指導の仕方や子ども達の反応を学ぶことができました。アクティブラーニングを多く取り入れることで、子ども達が主体的に活動できるようにしたり、英語の発音練習もジェスチャーをつけて、リズムカルにされていたりしました。子ども達もそれに応えるように、楽しんで学習していました。授業をする時は、子ども達が英語に苦手意識を持たないように、英語に親しみを持てるような工夫をしていきたいと思いました。なかよし学級では、時には生活単元学習という授業で調理実習のサポートをしたり、個別に教科を教えたりしてきました。あらゆる教科でいろんな子ども達や先生方と関わってきた7か月間でした。

私がこの長い7か月の活動を一言で表すなら、『成長』だと思っています。この成長には、自分自身の成長ももちろんありますが、5月から子ども達を見てきたので、子ども達の成長を特に感じています。初めてなかよし学級の子と関わった時は、児童の行動が読めず、信頼関係も築けていなかったのも、どのように対応をしたらいいのか分からないことが多々ありました。上手くいっていなかったと思う日は、活動後になかよし学級の先生方と一緒にお話をしたり、その子が興味を持ってくれるようなものを調べてみたこともあります。それらの経験を踏まえて、対応をした際の子どもの反応は、やはり大違いでした。その子の特性を生かした注意や声かけ、好きなジャンルの本を探して興味を持たせるといったこともできるようになったので、その日以後上手くコミュニケーションを取れるようになりました。自分自身の成長を、活動を重ねるごとに実感しています。

子ども達との関わりの中で得たのは、「個に応じた対応」の重要性です。個に応じるためには、その子のことを知ることから始まり、そこから信頼関係が築かれ、上手くコミュニケーションができるようになることを学ぶことができたので現場でもこの考えを忘れないようにしていきたいと思っています。そして、子どもたちの成長に関しては、なかよし学級の子と一緒に過ごす時間が多い分、成長を感じることは多いですが、なかよし学級以外の子も大人になったなど

思うことがありました。学校インターンシップの時は、上手く友達と関わらず、目立った行動が多かった1年生の児童が、スクールサポーターとして学校に行った時には、友達と仲良く話したり、本と一緒に読んだりできるようになり、落ち着いて生活できるようになっていました。また、5年生は、前と比べて、6年生になるという自覚が生まれてきたと感じる行動が増えたように思います。数ヶ月で児童はこんなにも変わるのかと驚かされました。

このように、子ども達の成長をそばで見られ、やりがいを感じながら活動できていることはとても楽しいです。教師になったらその成長を毎日みられると思うとわくわくしてきます。この活動を通して教師になりたいという気持ちがより一層強くなってきました。まだまだ、活動は続きますが、今後も、子ども達と一緒に成長できるように頑張っていきたいと思います。

学校園ボランティア活動を終えて

教育学科 4回生

赤坂莉奈

私は、大学2回生の秋から神戸市の小学校に2年半スクールサポーターとして通わせていただいています。その中で私が感じたことは、2つあります。

1つ目は、先生のことを子供たちはよく見ているということです。ある日、図工の専科の先生が喉を痛めて、声がほとんど出せない日がありました。授業前に私は、「マイクをお借りしてきましようか。」と申しました。しかし、先生は「大丈夫。」とおっしゃったので、私はほとんど声が出せない状況で、どうやって授業をするのだろうかと授業が始まるまでそわそわしていました。図工室に入ってきた子供たちは、いつも挨拶してくれる先生が無言であることに違和感を覚え、先生が話すのを静かに座って待っていました。先生がジェスチャーを使いながら出せる声を絞り出して話し始めると、子供たちは先生の声拾おうと、身を乗り出して真剣に耳を傾けていました。一番後ろの席の男の子が「聞こえん。」とボソッとつぶやいた時、隣の席の女の子が「聞こえんのじゃなくて、聞くねん。」と真剣な表情で言っていたのが、今でも印象に残っています。子供たちは、先生の表情や声のトーン、行動など細かいところまで見ています。言葉で褒めていても、その言葉に気持ちが乗っていなければ子供に見透かされてしまうことをこのスクールサポーターの活動の中で、何度も学びました。子供が何を願っているのか、何を認めてほしいのかを理解するために、子供の些細な行動や言葉にアンテナを張るように意識することの重要性を学びました。図工の先生のように声が出せなくても授業ができるくらい、子どもたちと信頼関係を築けるよう日々子供との関わりの積み重ねを大切にしていきたいです。

2つ目は、教師間の団結が大切であるということです。学校のルールのほかにも、同学年の先生で話し合った学年のきまりがあります。学年の先生方がどんな風に成長してほしいのか話し合っていて、決めたことを乱してはいけないことを経験から学びました。授業開始の1分前には座っておくきまりを知らずに、私が子供と喋って過ごしてしまったことがあります。そういったきまりを守らなくても許してくれる先生がいることで、クラスや学年のまとまりが失われる可能性があると考えました。なので、スクールサポーターでも子供を育てる教員の一人という責任をもって、活動をする姿勢を学びました。

4月からは、担任として学校現場で働きます。学年の先生同士の団結が、その学年の子供たちの成長に繋がり、学校全体の教職員間での団結が学校全体をよりよくしていくと学びました。先生同士の関係性も子供はよく見えていると思います。新任教員として、現場で働く先輩方の背中を見て学ぶ姿勢を忘れず、スクールサポーターでの経験を活かしながら、大好きな子供たちの為に、一生学び続ける教師になりたいです。

学校園ボランティア活動を終えて

家政学科 3 回生

高 橋 来 夢

私は 2 年間、週に 1 回、中学校でスクールサポーターとして生徒の学習支援をしました。スクールサポーターに挑戦しようと思った理由は、生徒に対して、どのような指導方法や関わりがよい成長を促すかを教育現場から学び、よりよい授業の基盤を築き、模擬授業や教育実習で実践したいと思ったからです。スクールサポーターの活動を通して学んだことを 2 点述べていきたいと思います。

1 つ目は、自ら心を開こうとしなければ、生徒と教師の信頼関係を築くことができない点です。活動を始めたときは、自信の無さの殻に閉じこもってしまい、緊張や不安のあまり、生徒に声かけをすることができませんでした。現場の先生方から「積極的に自己開示するとよい」とアドバイスをいただき、実践しました。休み時間に勇気を出して声をかけてみると、すぐに打ち解けることができ、生徒との距離が縮まりました。よって、勇気が自信へと変わり、積極的に生徒と接することができるようになりました。この経験から、生徒と向き合おうとする姿勢が重要であることを気づくことができました。現場の先生方とお話をしているとき、はじめて話す生徒が声をかけてくれるということがありました。教師同士が信頼関係を築くことは生徒との信頼関係を築くきっかけになり、授業のことだけでなく、日常生活、家庭環境について相談しやすい環境作りができ、生徒が不安を抱えず、気持ちよく学校生活を送れるのではないかと考えました。

2 つ目は、生徒の学習意欲や興味を引き出すためには、入念な教材研究が必要である点です。サポートさせていただいた授業は、限られた時間の中で ICT 機器の活用やグループワークなどの主体的・対話的・深い学びが取り入れられた授業ばかりでした。どの先生方も「生徒が主役」を念頭に、生徒の視点で授業計画されており、生徒に寄り添った指導やメリハリをつけた授業展開により、生徒が興味をもって教師の話聞き、集中して授業を受けている様子が伺え、学習意欲の高さを感じました。

スクールサポーターの活動を通して、上記の学んだことのほかに、サポートするときに生徒一人一人の理解度を把握し、解答を伝えるのではなく、生徒が自分自身で考え抜けるよう、解答に導く方法を伝えることを心がけ、模擬授業で自分なりに実践しました。また、指導者としての自覚を持ち、教師と生徒の距離感の回り方や何事においても積極性が重要であることを教育現場に行ったからこそ感じることができました。

今年、教育実習を控えているので、この経験を活かし、正面から生徒と向き合い、「生徒が主役」となる授業をしていきたいです。